

2014年10月11日(土) 於：愛知大学名古屋校舎厚生棟3階W32会議室

第20回 日中戦争史研究会 議事録

出席者：

石島紀之(フェリス女学院大学)、大野絢也(愛知学院大学)、岡崎清宜(愛知県立大学)、菊池一隆(愛知学院大学)、千賀新三郎、張鴻鵬(名城大学院)、成瀬公(愛知学院大学)、野口武(愛知大学)、馬場毅(愛知大学)、丸田孝志(広島大学)、森久男(愛知大学)、楊韜(仏教大学)

五十音順、敬称

略)

議事録作成：宋曉凱(ICCS 研究員)

1. 張鴻鵬報告：「遠藤三郎と重慶爆撃-《遠藤日誌》を中心に-」司会：森

[質疑応答]

森：張さんは、ノモンハン事件と重慶爆撃、さらに太平洋戦争における戦争史の流れ、これらにどういった形で遠藤が関与したのか、あるいは彼が軍の要人に提出した各種の文書の評価などを報告した。今回の報告について、ご指摘いただきたい。

岡崎：15ページの「おわりに」で、「ノモンハン事件から重慶爆撃への歴史的意義は、日本政府の国策を「北進」から「南進」へ転換させることにあると言えるであろう」と書いてあったが。南進は普通、日本海軍の情報をある程度おさえないと、ちょっと立論的に難しいのではないかと。そのへんについて張さんの意見をお聞きしたい。同じく、「おわりに」で、「日本戦争指導層は中国軍民を見縊り、アメリカの軍力にも目を向けず」といっているが、多分、この時代の参謀本部のあらゆる人間は、アメリカの国力がどれだけ強くて、どんなに戦っても、1、2年も無理だということは知っているわけである。これは明らかに事実誤認なのではないか。にもかかわらず、アメリカとの戦争を展開しているところにある程度、入っていないと事実誤認と思われかねない表記だと思う。そここのところの張さんのお考えをお聞かせください。

張：南進政策は、主に日本海軍が主導した。重慶爆撃の際、陸軍と海軍が両方とも参加した。当時、百二号作戦の末期に、揚子江と嘉陵江の合流地点に停泊していたアメリカ海軍のツツイラ号を爆撃したことがある。重慶爆撃の末期に入ると、日本陸軍の飛行隊と海軍の航空部隊が、英米の船を爆撃したことがある。それは、英米との戦争、衝突になる一つの要因になる。ここは、ご指摘のとおり、確かに記述の問題があるが、「アメリカの国力にも目を向けず」というのは、山本五十六はアメリカでの留学経験もあるし、彼からすると対米戦争に勝利できないと主張した。「アメリカの国力にも目を向けず」と主張したのは、日本軍の一部である。

岡崎：具体的に誰を想定している。田中新一とかはそのような考えをしていない。

張：田中新一は基本的に対ソの強硬派である。

森：対米作戦が行われるにあたって、日本軍部の中で、対米戦に自信をもっていた人たちがどれぐらいいたのかについて、張さんはかなりいたと主張している。そこがポイントである。企画院総裁の鈴木貞一は、劣勢だとわかっているが、やったのだとしている。自信があつてやったのではなく、むしろ逆の見方もある。

張：対米戦争を開戦する前に、どのような想定をしていたのか。

森：当時の想定は、開戦すると、2年以内に、石油の備蓄が底をついて、戦う前に日本陸軍は戦争を続ける能力を失ってしまうので、その前に、なんとか開戦をしたい。決意をもって戦争をやったのだというのは、鈴木貞一の考え方だ。その側面を私たちが伝わってくる。ほかに、ご意見をお願いします。

石島：細かい質問である。一つ目、5ページの後ろから5行目の「中央部」という言葉は何を指しているのか。二つ目、14ページの下から10行目に「こうなると日本政府は日米開戦か、中国からの撤退かこの二つのコースの一つを選ばなければならなかった」と書いてあるが、実際には両方を続けた。日米開戦したが、中国からの撤退もしなかった。当時の東条英樹が、会議で、中国からの撤退がとんでもないと主張した有名な事実がある。ちょっとこの言い方が気になった。

張：「中央部」という言葉は遠藤三郎の日記に出ているが、当時の陸軍の参謀本部を指している。遠藤日記によれば、遠藤は10月ごろに陸軍中央部に戻って、「対ソ戦継続不可能」の意見を陸軍上層部に提出した。12月になると、遠藤は再び新京に戻った。対ソ戦を継続する必要があると主張する関東軍の軍人は、遠藤の意見に強く反対した。6ページの手紙は遠藤が東京に戻ったあと、参謀本部へ出した反対意見を説明しているものである。遠藤が参謀本部に帰って、参謀本部と議論した内容は、5ページの上から4行目にある。

森：今の話で気になったのが、対ソ戦作戦計画はどうするか、という根本的なところで、遠藤と陸軍中央部との関係について問題提起が行われているが、対ソ戦を継続しようと思う人がだれもないのではないか。年度作戦計画の対ソ戦の部分について、関東軍が具体案を作るという役割分担になっているはずだ。計画を作るというレベルの問題と、対ソ戦継続とは、まったく別次元の話である。計画を作るというのは、対ソ作戦計画の話である。

張：先生がおっしゃったのは関東軍の対ソ作戦についてですか。

森：ここでの議論は、作戦計画に関する意見対立であつて、対ソ戦継続に関する議論はどこにもないじゃないの。

張：ここの対ソ戦継続論は、遠藤が1939年9月8日に、現地に行つて、ソ連軍と停戦協議をするとき、対ソ戦継続不可を主張した。その時、ノモンハン事件はまだ終わっていない。ノモンハン事件の末期も遠藤は対ソ戦継続不可能と主張した。ノモンハン事件のあと、対ソ仮想作戦という主張は関東軍内部でもあつた。継続論と仮想作戦という言葉の使い方の問題なのか。

森：継続するかどうかということは、ノモンハン事件が終わっていない段階では当然あるはずで、ここでの議論は、終わった後の戦争を継続したいという関東軍参謀の気持ちを指し

ている。

張：14 ページに「こうなると日本政府は日米開戦か、中国からの撤退かこの二つのコースの一つを選ばなければならなかった」という記述がある。アメリカ政府は、日本に中国大陸から撤退しろと要求した。当時の東条は撤退してはいけなく強く主張した。当然、中国から撤退しないとなれば、米英との衝突が激しくなる。当時のアメリカは、日本に対して石油と鉄鋼の禁輸政策を発表した。日本政府は最終的に対米戦を回避できないと判断した。日本にとって、選択肢はこの二つしかないじゃないか。

石島：表現の問題だね。二つの選択が迫られたが、日本政府は、中国からの撤退をせず、対米開戦の道を歩んだという言い方が、事実の通りになっていると思われる。

張：記述の問題がある。

岡崎：遠藤は「関特演」反対という意見具申の一文を、参謀総長と陸軍大臣に伝達するように板垣大将に依頼したが、ちゃんと届いたか。

張：遠藤の自叙伝によると、そのような依頼をしたが、ちゃんと届いたかどうかの記述がない。ですから、遠藤の反対意見が具体的にどのような役割を果たしたか判断できない。

石島：今のところですが、種村の発言は遠藤の文章を反映しているものか。

張：はい。ここでは、遠藤の「関特演」に対する反対意見を証明する目的で、引用した。

丸田：意向がちゃんと伝わっているかどうかわからない。もう一点、遠藤の反対意見が反映されたかどうかの立証や日米開戦が不可避になるような歴史推移などを考えたりすると、ここまでの評価ができるかどうかという疑問がある。

石島：論文のもとになっているのは、遠藤三郎の本だよね。遠藤はそう言っているが、他方ではどうなっているか。やはりなんらかの形で裏付けを取らないと、遠藤の役割を評価できるかどうか問題になる。

森：その結果ということは、遠藤の本には書いていない。「その結果」という4文字が余計だ。遠藤は自分の考えが影響を与えたとは書いていないだろう。

張：遠藤の意見文は参謀本部に届いたかどうか確認できない。しかし、彼の主張は参謀本部に届いていると思う。遠藤は「関特演」を反対する参謀本部内部でも陳述したことがあるから。

丸田：意見が届いても、その結果らしい見受けられたかどうかはまた別の話である。

森：遠藤は、荒木陸相の時代に作戦班長をやったが、二二六事件のあと、軍の主流から排除されたので、遠藤の主張が中央の方針に影響を与えたというのは、その点の評価はなかなか難しい。

石島：2 ページのところに、遠藤三郎が重慶爆撃無用論を出して、採用されたと書いてあるが、これの評価はなかなか難しい。9月3日に意見を出した3日後には、日本大本営は対米戦争に向かうと決めた。遠藤の上申書が遅すぎたわけで、果たして直接これが本格的な爆撃中止の理由だったかどうかを、もっと検討すべきだ。もう一つ、北進論、南進論の問題であるが、ノモンハン事件が大きな役割を果たしたのは間違いである。実際、日本が南進を始

めるのは、40年の夏から始まり、41年に南部仏領インドシナ進駐を行い、その間に三国同盟を結んだわけだ。日本が対米戦争の方向に大きく舵を切り始めたのは、その前である。特に、40年の百二号作戦の大きな目的は、日中戦争を重慶爆撃の一つの手段として、早期に終わらせて、そして本格的な南方進出に向かうことにあったのではないか。41年になると、40年の大規模な百一号作戦が成功しなかったわけで、ある意味では、百二号作戦による41年の重慶爆撃というのは、延長上にやったが、百一号作戦ほど重要ではないのではないか。その間に、対ソ戦が始まり、「関特演」をやったりして日本の戦争指導が動揺するが、大きな流れはそのぐらいではないかと思う。その中で、重慶爆撃において、遠藤が果たした役割は非常に大きいが、客観的にそれをどうみるかについてさらに慎重に検討していただきたい。

張：遠藤の重慶爆撃無用論を参謀本部への提出するのが遅すぎたというのは、事実である。実際に、遠藤は40年8月に漢口の第3飛行団に派遣され、爆撃に参加した。41年の夏ごろ、重慶爆撃を指導した。無用論を提出したのは9月3日である。実体験に基づいて、無用論を提出した。爆撃に参加した1か月後になる。2点目について、40年の百一号戦と41年の百二号戦については、先生のおっしゃったとおりである。百二号戦の目的は、迅速に日中戦争を終わらせ、本格的に南進するという点に同意する。重慶爆撃の後期に入ると、日本の目的は、対中戦争を早い時期に終結させ、南進政策を展開するためである。

森：遠藤三郎が重慶爆撃に参加したのは確か後期である。その時海軍は南方作戦の準備のため、重慶爆撃をやめることにした。その後、遠藤三郎は重慶爆撃をやっても効果がないというが、その理由としては、低空で爆撃しようとする、対空砲火で攻撃され、犠牲が出るから、上から落とすしかない。ピンポイント爆撃などは実行できないのが、遠藤三郎の主張ではないか。蒋介石を狙ったが、できなかった。その関連で、揚子江の船舶と塩田に対して爆撃を実施したが、遠藤が受けた命令は塩田を爆撃するものであるが、勝手に揚子江の輸送船に作戦を切り替えた。遠藤は上部から受けた命令と違ったことを独断でやった。そのへんの評価の部分はどうするか。

菊池：注47番の資料は遠藤の著書から引用したものである。重慶爆撃のことを評価ために、遠藤の書いたものを引用するのはいかがなものか。引用の仕方を注意すべきだ。遠藤の思想の変遷はどのように変わってきたかをもう少し明確にしてほしい。「臨時首都」という表現はあるが、戦時首都という言い方もあるが、「臨時首都」でいいのか。

張：先生のおっしゃったとおりだ。重慶爆撃を実施した原因は、地上部隊がなかなか集まらないからである。

菊池：重慶に攻め込めない状況がある。もう一つ、攻めるために、空から攻めるしかない。ようするに、ポイントを二つに集約するから、おかしいわけだ。

森：日本の戦争指導全体の流れ、遠藤三郎がどのようにかかわったかという大問題から入っていくから、そういうことになるのではないか。

張：二つ目の質問について、エドガー・スノーと吉田曠二の話を引用した、遠藤の主張を

証明するためだ。もちろん、引用しすぎると、遠藤から外れる傾向が出てくる。

岡崎：重慶爆撃を実施した時の第一部長は富永恭次で、作戦課長は稲田正純だよ。彼らはどういう考え方をしていたかをトレースすることができないか。

張：詳しく見ていないので、お答えできない。遠藤の戦略転換について、以前の報告で触れたことがある。例えば、満州事変のあと、遠藤が満州に派遣された当初、関東軍の北満出兵に反対したが、ソ連軍が満州の国境を攻めることができないという事実が視察で分かってから、出兵を進めるようになった。彼自身の戦略というか、そのような考え方が変化する一時期もあった。

森：遠藤三郎の個人的影響はかなり日本軍の動きに与えた時期もあるが、今回発表された時期は、遠藤の影響力がほとんどゼロになってからの時期で、それにもかかわらず、遠藤の意見書がどのような影響を与えたかというところに違和感を覚えた。

張：確かに熱河作戦のとき、遠藤は実際に作戦案を持参して、また熱河作戦は実際に遠藤が企画した作戦案によって行われた。これらは遠藤と関係があって、遠藤が重要な役割を果たした。今日報告した時期は、重慶爆撃およびノモンハン事件の末期であるが、遠藤は9月8日に新京に、9月11日ノモンハンに入り、15日に停戦協定をした。彼が関与した期間が非常に短かったため、ノモンハン事件における遠藤の役割は限られていた。今日は、その後の遠藤の対ソ戦の考え、戦略を明らかにしたい。36年に陸軍大学で講義した対ソ戦争講義録のなかで、対ソ戦の勝利が36年で、その後は勝利する可能性がないという予測を彼が出した。ソ連のデータに基づいて、判断を下したわけである。その影響で、ノモンハン事件の末期および40年、41年関東軍の時、彼は対ソ戦継続不可、対ソ仮想戦不可とも主張した。

森：対ソ仮想作戦について、遠藤の主張はまったく受け入れられなかった。というのが、今回の報告の結論になるのではないか。全体の構成で、戦争指導の流れが詳しく書かれて、その合間に遠藤の意見書が入っているが、遠藤の役割を強調したければ、戦争指導の部分をもっと簡略にしたほうがいい。なぜなら、ノモンハンに関する研究がたくさんあって、さらに論じる必要がない。あるとしたら、遠藤がどうかかわったかという部分に収斂されていくと思う。遠藤の日記は1940年と41年の1月から8月までの部分が存在しない。今日の報告には、遠藤日誌に記述のないことが結構書かれているが、そういうことを紹介しても意味があまりない。全体として、遠藤日誌に即してまとめると、非常に意味があると思う。

張：戦争指導の内容を簡略せよとのご指摘であるが、私の理解として、ノモンハン事件の戦争とかを簡略し、遠藤が関与した内容を詳しく書いた方がいい。重慶爆撃も同じである。

森：重慶爆撃に関与したのは末期で、軍全体として重慶爆撃のことをあまり重視していない。遠藤は意見書を提出したが、あまり効果がなかった。日本陸軍の長距離爆撃は機材の問題もあって、非常に脆弱だった。陸軍に任せたとすることは、もう重慶爆撃がヤマをこしたということではないか。

張：先生がおっしゃった40年と41年1月から8月までの遠藤の日記は輸送の関係でなくなった。そのへんの内容について、遠藤の自叙伝に自身の日誌を引用したのがあったので、

私はそれを引用した。また、41年8月までは、遠藤は漢口にいたので、重慶爆撃に関与していなかった。ノモンハン事件や重慶爆撃に、遠藤が直接関与した時期が短かったので、論文では遠藤の戦略思想と戦略構想そのものを明確にしたい。遠藤が戦争においてどんな役割を果たしたのかの究明を目的としない。

2. 石島紀之報告：「近代中国民衆の実相の探求-『中国民衆にとっての日中戦争』を執筆して」司会：森

[質疑応答]

森：石島先生は、刊行されたばかりの『中国民衆にとっての日中戦争』を主要な題材にして、まず、資料利用上の問題点、特に民衆自身が書き残した資料が乏しい中、日中戦争史をどういうふうに研究したらいいかについて説明された。第一部は中国農村地域の貧困問題を報告した。第二部の太行区根拠地について、以前報告したことがある。終わりに、方法論的にどういうふうに民衆史の研究をしたらいいかということについて、ある程度の方向性を示している。今日は、専門家の方が何名かいらっしゃるので、適切なご意見を期待している。

馬場：天門会というのは紅槍会組織の中で特殊な存在だった。1920年代に、天門会に共産党員が入っていたが、28年ごろに追い出された。天門会は43年に日偽武装に改編したが、これは、治安強化運動により、生き延びるために改編したのである。「白皮紅心」という言葉のように、生き延びるための行動だったと考えられる。村の協同性の云々というところでは、著書では互助組の取り組みに触れていないが、協同性というのは、ないといわないが、非常に弱いものだと思う。本のことについて、いくつかの質問をしたい。まず、民衆の実相と心性明らかにする研究は、従来の抗日根拠地研究を改め一歩進めたと思った。自身も刺激を受けたし、参考になった。とりわけ、資料がいいなと思った。共産党の公開された新聞ではないので、かなり率直に共産党側もものをいっている。1点目の問題、チャルマーズジョンソンはナショナリズムによって、抗日戦争の初期、日本軍の侵略に直面した一部の農民が立ち上がったと書いているが、そういう側面はあるが、1941年から42年の治安強化運動期は、日本軍の掃討戦によって、このような事態をもたらした八路軍の共産党に対しての恨みすらでてる。少なくとも、治安強化運動によって、農民の組織化が進んだとはいえない。治安強化運動の時、日本軍は不意打ちでの包囲戦で八路軍を殲滅しようとするが、八路軍が包囲の輪を破って逃げている。日本軍はそういう意味で目的を果たさないが、残される民衆にとって、八路軍の信頼がなくなるわけである。だから、治安強化運動の時、ナショナリズムによって農民が動員されるというのは成り立たないだろう。二つ目、田中恭子さんの見解、減租減息だけでなく、古いつけを返還させることを加えたことによって、農民が立ち上がる。これについては肯定される。私は田中さんに賛成できないこともあり、文字通りの減租減息だけでなく、古いつけの返還等を含めてこの運動が農民の参軍に結び付いている事を重視したい。私はそういうふうに考えている。特に43年、44年、45年。減租減息それ自体を目

的としているではなく、生産運動なんかを含めた広い意味での減租減息は農民の参軍と結びついており、その成果が農民の参軍の増加になっている。それから、3つ目、早い時期から山西省では農民の参軍をやっている。山東省において韓復榘政権は日本軍が入ってくる中で崩壊してその後、各地で共産党が武装蜂起をした。そこに紅軍のリーダーを送り込む、それがのちの山東縦隊になる。それを拡大する過程をみると、既成武装力の組織化ではないか。保安隊とか、民団とか、紅槍会、国民党の武力などである。つまり、直接農民を参軍に動員するのは初期ではほとんどできていない。ところが、山西省ではかなり早い時期からやった。閻錫山政権があつて、そのもとで義盟、新軍とか国共合作の形をとった合法組織があり、あるいは国民政府の統治機構が残っているため、主体となって農民の参軍をやろうとしていたと考える。一方、山東の場合、主力である115師の兵力拡大をみても、少なくとも40年末ぐらいまでは、農民からの直接の参軍がほとんどない。お聞きしたいのは、既成武装兵力の組織化というのは八路軍の拡大のときにやっていないのか。それから、中国共産党は紅軍時代から、主力軍、地方軍と民兵の3つに分けている。この時期の主力軍は八路軍、地方軍は遊撃隊で、あとは民兵になる。110ページのところの自衛隊、基幹隊というのは明らかに民兵だと思う。地方軍というのはある地域に固定して、動かないものである。農民の参軍を考える時にその中で民兵は危険が少ないという意味で一番よいと思う。その点に関連してご本の中に、民兵の負担が重いと書いてあった。この点は大変勉強になった。主力軍、地方軍、民兵のカテゴリー分けをするべきではないか。精兵簡政のとき、党中央から、平地においては主力軍と地方軍の比率は1対1で、つまり主力軍を地方軍化させる、山区は余裕があるから、2対1であると指示が出ている。やはり、軍のカテゴリー分けしたうえで、徴兵する時の負担の意味、農民にとって動員の意味が違ってくると思う。もう一つの事実確認をしたい。205頁の「分区」は「軍分区」ではないかと思う。

石島：時間の関係でまとめて質問していただき、答えさせていただきたい。

菊池：社会史からいまままでやってこなかった民衆史を分析する趣旨がいいが、今度逆にあまりにも社会史に特化しすぎて、戦争の背景がみえなくなっていると感じている。石島さんは、戦争といったが、王有明でしたっけ、彼は朝鮮戦争、国共内戦から朝鮮戦争を研究している。抗日戦争か、国共内戦か、朝鮮戦争かということをはっきりして、その時における民衆の心性問題を出したほうがいい。そして、例えば、民衆は「利己、恐怖、軟弱、無力、無策」一時期はそういわれたが、今度繰り返して、革命のために正義のために、ぎらぎらした民衆がでてきた。日本にもずる賢い民衆があるが、その価値観は否定できない考えられる。現実問題としては、「利己、恐怖、軟弱、無力、無策」の民衆が常にそうなのか。民衆の変化の推移がみえない。民衆は嘘つきもので、その当時当時の価値観で話をする。現在の価値観で話し、いやなことは話さない。いいことを誇張する。歴史上の裏付けがなければ、極めて危ないので、歴史上の資料をみてもらいたい。「利己、恐怖、軟弱、無力、無策」なのかどうかは、攻めた側の日本軍の資料も見べきだ。両側からみていかないと、民衆史なんか構築できない。そして、飢饉の問題もある。飢饉があれば、すぐ革命がおきそうだが、窮乏

しすぎると、暴動が起きない。暴動が起きるためには余力が必要だ。完全にふらふらの状態では、できるわけがない。民衆といっても、やさしい民衆、ずる賢い民衆、いじわるの民衆、様々で、一つの体に入る可能性もある。時期によって、民衆の姿も異なる。そういう民衆の真の姿を明確にすべきである。歴史学、社会学、経済学様々な角度から分析すれば、本質の民衆史がみえてくる。そうしなければ、社会史は長続きしない。

丸田：資料の件について、基層幹部向けの資料は民衆に近いので、探して利用した方がいい。政府の広報があるが、档案には出てこないが、台湾には断片的にあるので、利用されたい。秘密結社のことについて、私が見た資料によれば、太行区では民兵のかなりどころが会門によって組織されている。秘密結社の会門の動きがどのような形でとらえられているか分かりにくいですが、そのような記述があるので、太行区ではかなりないというわけでもなく、地域によっては性格があるのではないかと。これは、生産とか社会関係の違いによって、太行区ではいろんなバリエーションがある。農民の協同性の問題について、共産党がやっていることの最終的な方向性としては、より個別性を強調していくということになりかねない。そうすると、地主をつぶすとか、いったんある程度村を必要に応じて解体して、協同性より個別性のほうにとらえ方が変わっていくという状況にある。そこのへんについてどう議論がされたかという点、一つは、呉満有運動、富農経済発展でいく、そうじゃなければ、まずしいところで、貧農たちを組織して、協同性を作る。2つの方向があったが、結局、土地改革で土地を分け合って、運動としてはやりやすかった農民を組織するが、協同性より個別性のほうにかける動きが多いのではないかと感想をもっている。1944年に太行区で労働英雄運動を初めにやった。これは、ある意味で呉満有運動みたいなことで、富裕な農民をほめたたいて、がんばれよというところがあると思う。先生の叙述だと、呉満有運動が警戒され、やはり中農を育てるということが強調されているような気がする。どっちもある気がする。やはり経営能力のあるものに地域の生産を任せて、それらの力を利用したい。一方、共産党だから、貧しいものにしなければ、と同時に考えていると思う。前者の呉満有運動みたいものは、国共内戦に入ってから、47年ぐらいにつぶされていく。その間、貧しい人を集めて合作社をやろうとしている。しかし、個別分散ということで、大衆が立ち上がらない。共産党は、場合によって、戦争でそこから兵隊をも求めなければならない、一時本拠地を放棄せざるをえなくても兵隊を出さなければならない、社会をつぶしても、食料を調達しなければならない状況があったりすると、破壊的な力を使って、やっていくことになる。落ち着いて協同性を育てる状況ではないという感じもする。

張：遊民というのは土地を持っていない、住居を持っていない人を指しているのか。

石島：はい。

張：それなら適する中国語は「流氓」ではなく、「盲流」だと思う。日中戦争の初期に、民衆は戦争に無関心と言えるが、なぜ戦争に無関心だったのか。

石島：秘密結社に関しては知識がたりないので、今日伺ったことを参考にしながらもっと考えたい。丸田さんが言われたように、間違いなく、秘密結社の動きがあるので、ただ資料

的にでてなかったの、書けなかった。本にもあったが、本当にそうなのかわからないが、山西省では閻錫山の締め付けによって、秘密結社が非常に弱くなった。村の協同性に関連して、「呉満有運動」の問題があったが、僕の本では合作社に関して若干書いたが、十分に書けなかったが、僕の感じでは労働英雄が合作社を組織することで、かなり新聞などで表彰されていた。表彰されたことから、その方が重視されていると思う。いかに農民を組織することが重要だ。ただ、こういう合作社が行われていた。それから、資料の問題について、太行における資料集は他の抗日根拠地よりかなり優れていると思う。太行で編纂した資料集が43年11月、46年1月、47年7月に編纂されている。そのほかに、武装委員会の資料もあるし、農民運動の資料集もあった。かなり使えるものがあった。それで研究しやすかった。

菊池：これは内部資料か

石島：はい。

菊池：改編されたのか。

丸田：改編されたことはない。

石島：軍の組織の問題について、僕の見限りでは、山東省で受けるような既成の軍事力の組織化がみられないが、犧盟会、山西軍から武装組織が作られたのは確かだ。新軍が39年～40年の反逆流闘争、閻錫山が共産党に攻撃を加える中、共産党の独自の主力軍、地方軍、民兵のカテゴリーの分析はその通りである。38年ぐらいの段階では、かなり不明確だった軍隊のカテゴリーが40年以降、とりわけ百団大戦以降それ以降、より明確になった。もう少し具体的に示すべきだ。

馬場：カテゴリー自体は紅軍の時代にあった。具体的に民兵を一生懸命に作ろうとする政策で重点化しない時もあった。兵員拡大のとき、地方軍も主力軍に入れてしまう。地方軍が疎かになって、共産党の人民武装政策はうまくいかない。

石島：百団大戦のときもその問題があった、

馬場：カテゴリー自体は紅軍の時代からあった。地方軍、民兵を拡大する政策をこの時期重点的にやっていないだろうか。

石島：そうだと思う。評価が本格化するの、42年以降ではないか。「軍区」について、資料を調べてメールでお知らせする。菊池さんに言われた社会史批判はそのような批判があるが、個人としては本の最後に書いたように単に社会史だけでなく、いかに経済や政治のながれを結びつけていく社会史が作れないかと僕の狙いである。民衆に関しては、今の反省としては、「利己、恐怖、軟弱、無力、無策」を強調しすぎたかなと思う。張さんの質問もあったが、無関心だったかことから、どのように変化するのを、もうちょっときちんととらえるべきだ。本当は日本軍側からも見るべきであるが、次の世代に期待したい。「盲流」は日本語に訳したらなんだ？

張：遊民だ。

石島：参考した資料には「流氓」となっている。中国史を研究する人が専門用語を使いすぎて、日本語に訳す必要がある。そういった問題も考える必要がある。

森：ご報告は、どのような問題が存在するのかが明らかになった点では、大きな成果だと思う。